

審査の結果の要旨

氏名 本 郷 寛 子

本研究は、日本の母親の母乳育児満足度を測定する尺度の改訂短縮版を作成し、その妥当性と信頼性を検証したうえで、その尺度を使って、電話によるピアサポートが母親の母乳育児に対する満足度に影響するかを吟味したものである。本研究では下記の結果を得ている。

1. 母乳育児と生活との両立は産後の母親にとって大切な点でありながら、「母乳育児自己評価スケール日本語第1版」(The Japanese Maternal Breastfeeding Evaluation Scale)には、母乳育児と生活との両立の満足度を測定する設問がなかったため、生活との両立を問う設問を2つ加えたうえで、5段階のリッカート尺度の妥当性と信頼性を検証した。3-4 カ月健診とその2 か月後の2 回得た215 人の日本人の母親からの回答を因子分析 (factor analysis) し、promax rotation の後で factor loading が小さい (< .5)項目を削除したところ、「母乳育児自己評価スケール日本語第1版」と同様、3つの因子が認められたので、その3つを下位尺度とした。「母乳育児自己評価スケール日本語第1版」では、「母親自身の母乳育児経験への満足度 (Maternal Satisfaction)」、「母親が感じた赤ちゃんにとっての母乳育児の利点 (Perceived Benefit to Baby)」、「母乳育児に対する否定的な捉え方 (Potentially Negative Aspects)」を3つの下位尺度の名称としていた。一方で、新しく加えた「母乳育児とその他の活動との両立 (Compatibleness)」の2つ設問は、「母乳育児に対する否定的な捉え方 (Potentially Negative Aspects)」と同じ因子に属していた。このことから、「母乳育児とその他の活動との両立 (Compatibleness)」を測定する2つの設問も、第1版の「母乳育児に対する否定的な捉え方 (Potentially Negative Aspects)」下位尺度と合わせ、新たに1つの下位尺度とした。そしてその下位尺度を「母乳育児と生活との両立の度合い (Lifestyle Compatibility)」と改名した。新たな3つの下位尺度は、どれも coefficient alpha 性が十分高かった ($\geq .78$)。しかし、「母親自身の母乳育児経験への満足度」の項目は4つを削除しても coefficient alpha が 0.93 と高いままであったので項目を減らした。多重線形回帰分析で、3つの下位尺度の妥当性を検証したところ、産前から母乳だけで育てたいと思っていた母親は、「母親自身の母乳育児経験への満足度」と「母親が感じた赤ちゃんにとっての母乳育児の利点」が高い傾向にあり、産後の2時点で母乳だけで育てていた母親は、「母親が感じた赤ちゃんにとっての母乳育児の利点」と「母乳育児と生活との両立の度合い」が高い傾向にあった。以上から、「母乳育児自己評価スケ

ール日本語改訂版」は、第1版より項目が少ない短縮版でありながら、十分な信頼性と妥当性が確認された。

2. 電話によるピアサポートが母親の満足度に影響するかを検証するために、日本の4施設で出産した母親を対象にランダム化比較試験(RCT)を行った。出産後の入院中、1か月、4カ月時にデータを集めることができた114人を分析した。このうち介入群の60人が研修を受けたピアサポーターからの電話での支援を産後4カ月まで受け、対照群の54人は通常の支援のみを受けた。ピアサポーターの研修は研究に先立って、研究者が2日間行った。「母乳育児自己評価スケール日本語改訂版」を用い、介入前後の母乳育児満足度の上昇の度合いを、一般化推定方程式(GEE)を用いて2群間で比較した。両群で比較したところ、尺度の合計点数の上昇度に有意差は認められなかった。さらに詳細な分析を行ったところ、対照群に比べ、介入群の母親は、産後1か月から産後4か月の間の「母乳育児と生活との両立の度合い (Lifestyle Compatibility)」の下位尺度の点数が有意に上昇していた(回帰係数 1.54 [95%信頼区間: 0.03-3.04])。産後1か月の「母乳育児と生活との両立の度合い」の点数によって層別化して分析したところ、点数が低いか中程度だった母親において、介入の「母乳育児と生活との両立」への効果量(介入の効果を測る標準化された指標)は0.40(標準偏差)であり効果が見られた。また、それぞれの母親の minimal important differences (最小重要差 MID)を計算し両群を比較したところ、介入群の母親のほうが対照群の母親よりもMIDより点数が上昇した人数が多いことが示された。

以上、本論文は、研修を受けたピアサポーターによる電話でのピアサポートは、日本の母親の母乳育児と生活との両立の度合いを高める可能性を示唆した。ピアサポートが授乳期間を延ばしたり、母乳だけで育てる割合を上げたりするという研究は多くあるが、ピアサポートが母親の満足度への効果を調べた研究は国際的にも少なく、非英語文化圏では初めてである。また、母乳育児の満足度の3つの側面を別々に分析して母乳育児に関する介入の効果を調べた初めての研究である。本研究は、研修を受けたピアサポーターによる支援によって、母乳育児と生活との両立における母親の負担感が軽くなる可能性を示しており、臨床的な示唆も与えた。本研究は、ピアサポートと母乳育児に関する今後の研究のさらなる発展に寄与すると考えられる。

よって本論文は博士(保健学)の学位請求論文として合格と認められる。